天童句集

特別
イ 4
3159
A15 (2)

14
3159
A15(2)

蕉村新花摘句のうちの
文山書屋蔵入れたくの和遠
蕉村句集奥羽凡草板下ち
後足若すぐみ草
蕉門新脱句
和洲立春詠

七十二丁

天童歌俳集

漆山天童自選

春之部

元旦　朝寿の一年々笛太鼓

萬歳の烏帽子きらめく初日哉

門松に隠り業(は)ある情著哉

自搏車に小松結(ゆは)えし子の日哉

春風に鶯を乗せくるキヤリかな

瀬戸の川

春風や屋のふ池のさゝら波

春風や光り淡らめ隅もなし

春風や赤前垂のあゝらしき

春風や酒屋の暖簾魚屋の板

春風や石の地蔵の笑ひ顔

春風やコロ〳〵と鮮屋

春雨や軒端〳〵の湯氣

春雨や濡れても大さわぎ男ぶり

夏雨や袋口心あり迷ふ

吐き

あら〳〵と桜を吹出す杉の森

海の音山の音の雨

桜狂女ゆらゆら花吹雪

花吹雪行きなやみたる日傘かな

山吹や翠の水に影したゝる

夏草や河のなごりの水

探梅や土手かこきの碁

碁の音顧みぬ人珍づる人

四辛まで花ひらきて五辛塔
夜更月や輝の孫の庵ひろ
玉川の砂利と共に夏の風
月の[illegible]ひとつ寺の跡
草の花や一夜ちりぬる寺の跡
花盛りひとつ[illegible]遍路
菫咲く側に[illegible]草鞋
角くめる草よ[illegible]野の羽

アナウラ

梅ぶ[illegible]洗たまゆ[illegible]
抜ひとつ抜ひとつ[illegible]鉢の梅
足裏で足跡の田螺探しけり
足裏の此不せんどと汐干狩
心外もいづくも来て初梅
草梅の中より一本遅さくら
京門や富士を背負て汐干狩
菜畑より降つて来るなり蔵弓梅

梅

一望は皆梅の花吉野山
雑煮食ふすべすくし稲荷山
蓬莱を思ふ確き稲荷山
福寿草咲くや京祇園坊
梅ちらで桜後桜すれ
黄金白銀マシサク咲くや雪の中
小流しや底よ新あり土手の梅
弱くと蟬ゴ死ぬ水の上

定ふく

海の音昨の夢や九十九里
筍や かちちの郷に暮れ
見殘しの筍数は捨るべく
筍や 地震ゆるぶる身の揺
高瀬舟乗らくとすらら柳かな
元朝と偽者道る一巨燈かな
合利子廣寒の花黄なるべく
今日も天気善し春蘭は〜柳て

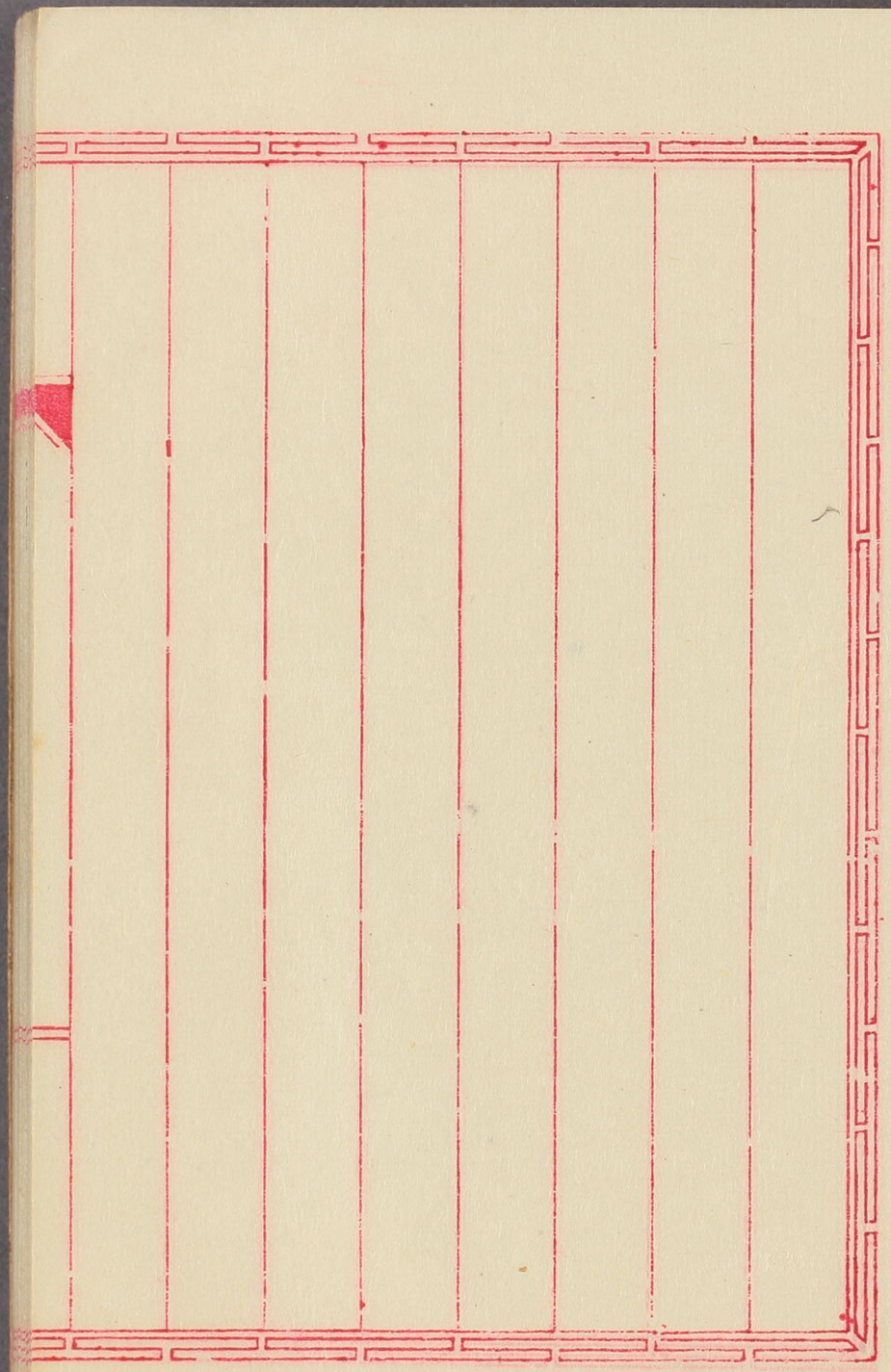
上総一宮に旅宿して

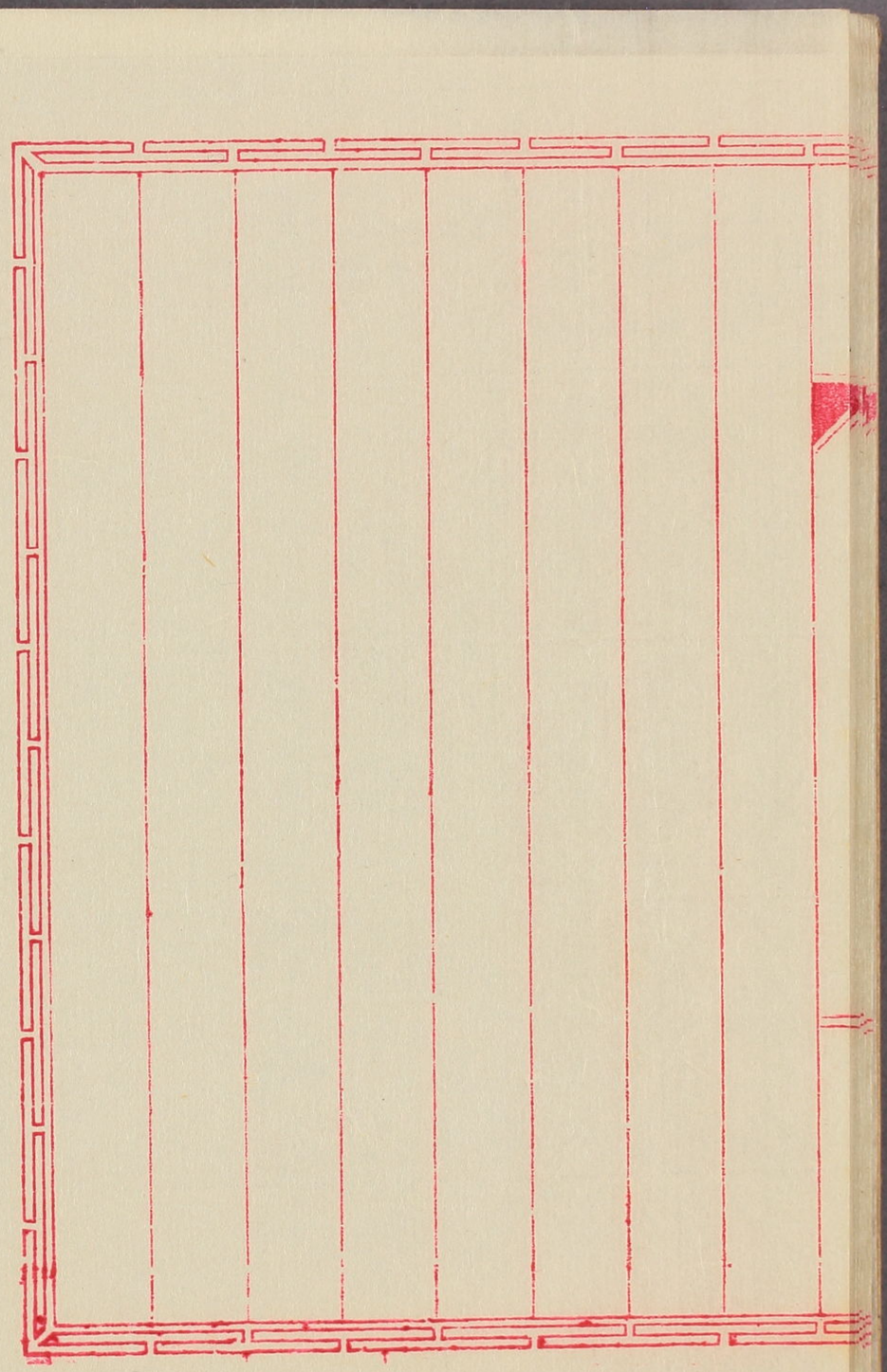
直江義を兼ねす吉野勢
枝葉そへ八重山吹の遅着す
古廣寺の鐘撞るはあらず
ものいなや吉原でゆくほくきす
古句佛の紙衣の句をかうかうせ
○
紅梅のうつろたる青し春の空
附句 ゆたり風光ったり霞俳
梅待ぶくぶはもるる生きけるる

陸奥山ノミミアラズ

多ポンやし遊ぶ咲きし黄金花
病若 樣側ら ゆざらえて色の梅見を
筒や竹となさんか喰はんの
路尽きて此所より一村桃の花
或ハ 此の村で路はてきりり桃の花
去れば谷えの小川のさゝら浪
木更津より鳴浜で湾ゝん汐干時
八鬼山 花ざらし 駄馬の木の葉

山門や　一立てたる　水鏡
山路や　青き流と　友うつる
山吹や　朝日の光り　てり返す
住楽の　垂るゝ住み　棲ふ
和歌の　洗濯物を　干すなり
一万作や　木の元洞の　雪解けつ





以下

14丁

白紙

幼吟

う

夏

首振りて天地見廻すトしぶく
キラリッと光る遠方の青松
病床　さらばぐらぐらし蟬の羽音の消ゆるさ
苦吟　襟ずれや天窓の上で蟬つるむ
枇杷の黄と甘き花果の美を味ひ
暫くはくさみらうらうぼくきくト
みしらぬ鳥や幼稚の雲流れきぶす

夏

左仲禮へ立寄たき暑さぶ
水經を枕に夏の昼寝の夢
草庵暮く新し桂蔭心異ぶ
鄙國に鶯雨花暑さ
亮はるさりすらう草
七の絵や外なる見ぬ桔梗
つうまえて情今嵯峨
日の国に筆を休息ス清水ぬ

剣右鳥部の寺清水寺
うゝ花の枕に送りし荘子ぶ
五葉松空柳をのばして老ぬ
青葉まして慈悲に月はる
蟬の声なりの音へ
蓮の上を過ぎぬ五月雨
少樣やかなくと五月雨
一本の蓮仲咲けり門田ぶ

蕪村にくみあり

故巣とゝの逃げ道や渡る花
ありやうは雉のあはれしほとゝぎす
初めより押すを知らぬ水鶏かな
短夜やねぶりの足らぬ鶏の声
短夜や函谷関の鶏のこゑ
初蝉や故郷の榎の木見えはるて
紙もあらて利鎌ひらきる清水かな
夕風や蠟燭掛ふ力無く

石菖にまだかくして螢かな
護国寺や庭は青梅の落ちる音
青苔に茂る範苅るなり芭蕉寺
つゆ晴れや土の香高き石楠花
一節の轍の末や雲の峰
川ばかり芦にかくれて行こま
蟬みゆる粟津の原の松の左
夏川や草にかくれて流れ去る

時の鉦鼓輪の中なる一座合歓の花
塩原や湯の梅よりはぶる若楓
富士つゝる水もゝ雪や早苗哉
鼓子花や静御前の釜の上
小流るまさかりの涼み哉
夕立や弁当はぬ坊主ぬれ
草の露は蚊よりたて持撫
瘧落ちて旅よ上れば若葉哉

さそはるゝや黙りこくつて釣り竿
あり合はせの屏風より青田哉
加賀なりや上州の雲野州の野
遠雷や敵国境を攻めよせ
銀杏を路傍に捨てとゞまれり
母親の浮かれてとゞまれり
頼もしさものゝあはれや法師蟬
夕立や傍ら合点の尻ぬぐひ

河骨や水門に紙を洗ふ人
行くゑんかな山の猿酒　海の鶴　鯨
杜宇待ちそめつ門を水鶏かな
洗濯の聖子落きし桐の花
接足き　児　[illegible]ちる苔の会を
瓜苗の高葉のうらに[illegible]月
高き世くれ今日の夢[illegible]和
武蔵野に紫[illegible]なきして苔の[illegible]

かな

急ぎ入り　つそぎ出て行く蟋蟀
古碑を探して出きし新茶や
蠻蛮　蟬も利鎌　恐しじ振り返り
五月雨や　秘蔵の池を焼き尽し
ほとゝぎす　あの〳〵や　行く子
ほとゝぎす　天に任せて　ゆくべかりけ
討ひた　縄　生き　返し　恨み　外
稲　葱　蕎　蛤　白　和　べき

杜鵑高蔭ニ外ガタカヒスル
待もせぬ五月雨の杜鵑
池をそこなき鶯の動きはさらさん
聲薮深入る口の蛙さい
日ながや　四日月
稲妻は稲をてらす　第二の示
若竹や　湖水うかぶ　竹生島
日に伸ぶ　筑摩あたりと　後宵花

注ニ曰ク、軒茅以上ヲ以ニ隱レテアルナリ

軒あらと見えて芭蕉の葉りか
さらさら塩屋の海津の蜑の数
一天い晴れて滿地の　行潦
堤めは秋の新　何漁る
鍬ぶりの水落ち　朴客もな
水鬱り叩くすゝき我が庵
早乙女の姿で若芽喜りあるく
閑よ待りて　ひとり　牡丹さ蕾ーはな

蓮華の郎ゆかしき
花菖蒲一点白金の花
蕎麦の赤い花
刈るさと芋すり起きて茄子ちぎる
魚ありとえて泣ふく菱の花
凌霄の巴の御花

古寺の
深山の絶間見る山の紅

濃藍の空ゆ迸ちやあげ雲雀
性急やかりと咲の枇杷の種
電信柱や白壁の人の戦ぎし
何玉か何ぞと電を評し合ひ
黒百合や戦跡の山の弾り壁

辞世 其人

死水や芝の浅しきの夏の井戸

其ノ二

我魂を呼びもどす蜀魂

ホトトギス

六月八日

旅行先の二首

わが魂かなんぞと見えて蜻蛉の

蜻蛉や蓮葉の蛙雨を嘆ぶ

アヤメを厨飯の菜くーたるけり

白雨や蜆捕ぶ込むいりの底

蜻蛉や地蜜もうかがず

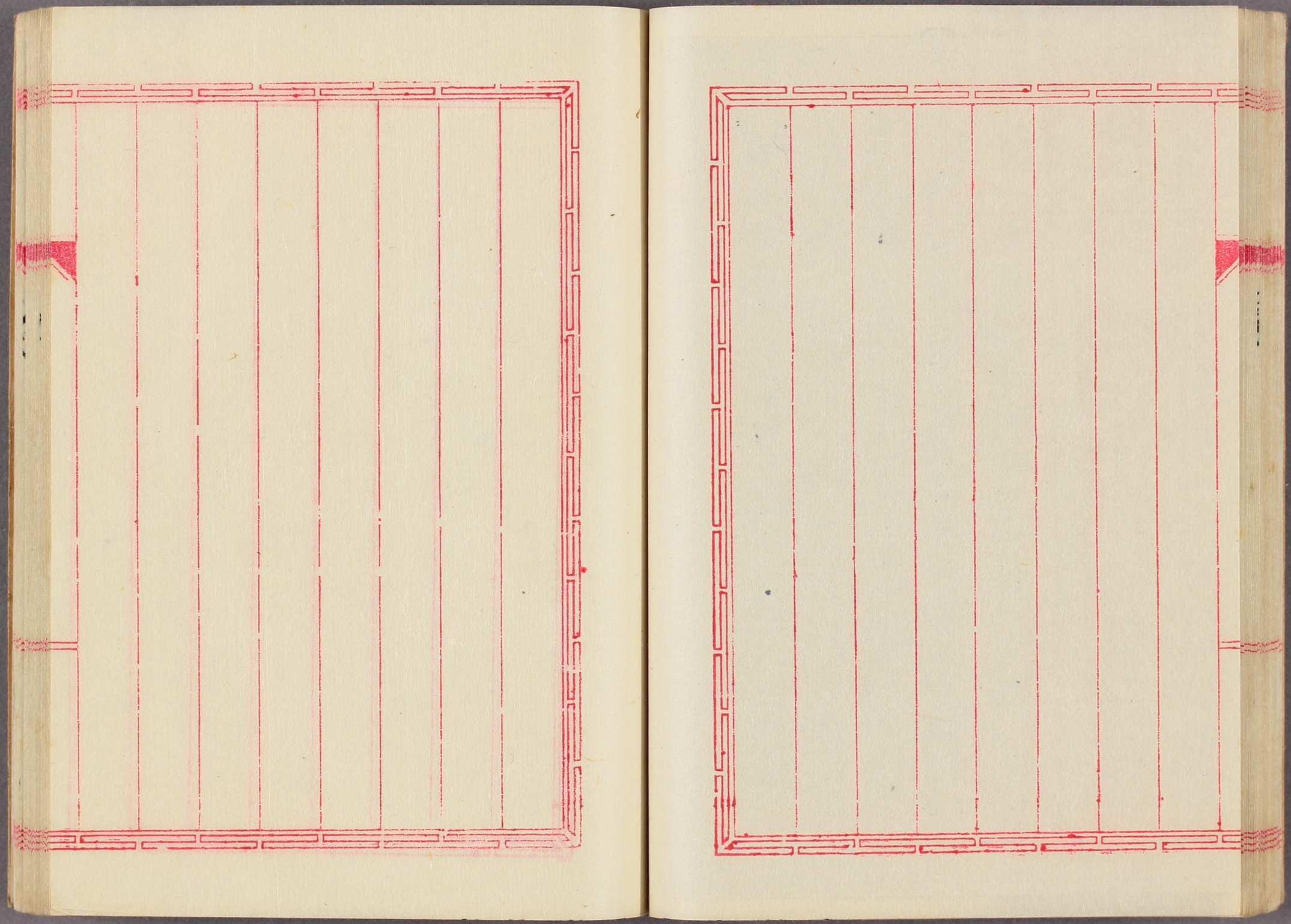
蜻蛉や蕎麦ふ

来た道も帰れる路も蜻蛉の時雨

蜻蛉や高山の雨

大殿君の羅宮滿時雨在蜻蛉時雨

蜻蛉や乳時雨と雪ノ雪を高る



以下
12丁
白紙

秋

宇羅分寺過ぎて燈籠露ひめて

旅人病ひもあらんと枯れ花

姉妹の国の石燈籠は仏住居

百舌鳥鳴くや漢の奏皮楠高み

田開作して鶏鳴くなる雲畑

木犀や夕日あかるき御簾の外

学究の肩を叩くや桐一葉

大

秋

筑波根の彼の面かくす薄かな

日ぬりや蹴上の茶屋の石垣に

陸奥を踏捨て西国菜花かな

たをたのうえぬ芙蓉の咲りかな

野ぶさあたりの柳ちる桐の葉

塵埃(ナコリ)ぶき出院の鳥帰

菊の葉の裏さえさびしき秋の風

四ッはらの蕎麦ばたの花

戸の隙ゆ明るかりけり百合の花

紫蘇の實をこぼしけり蓼の穂

牡丹花の生るくれる茅の輪かな

かくつれつくづくと秋の陰

故郷や月さむうして山の松

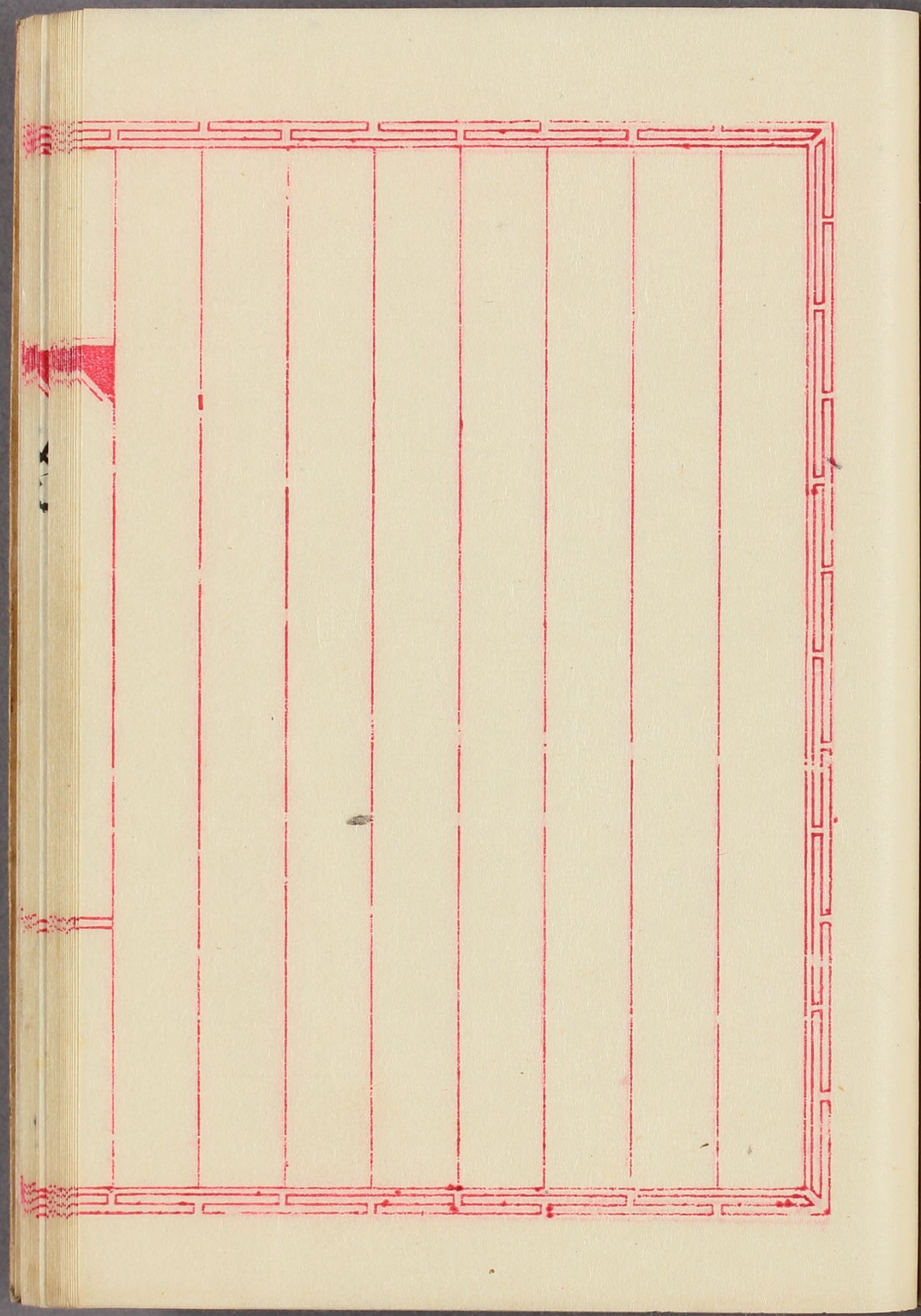
時雨るゝや蓼の穂ゆ燃えかね

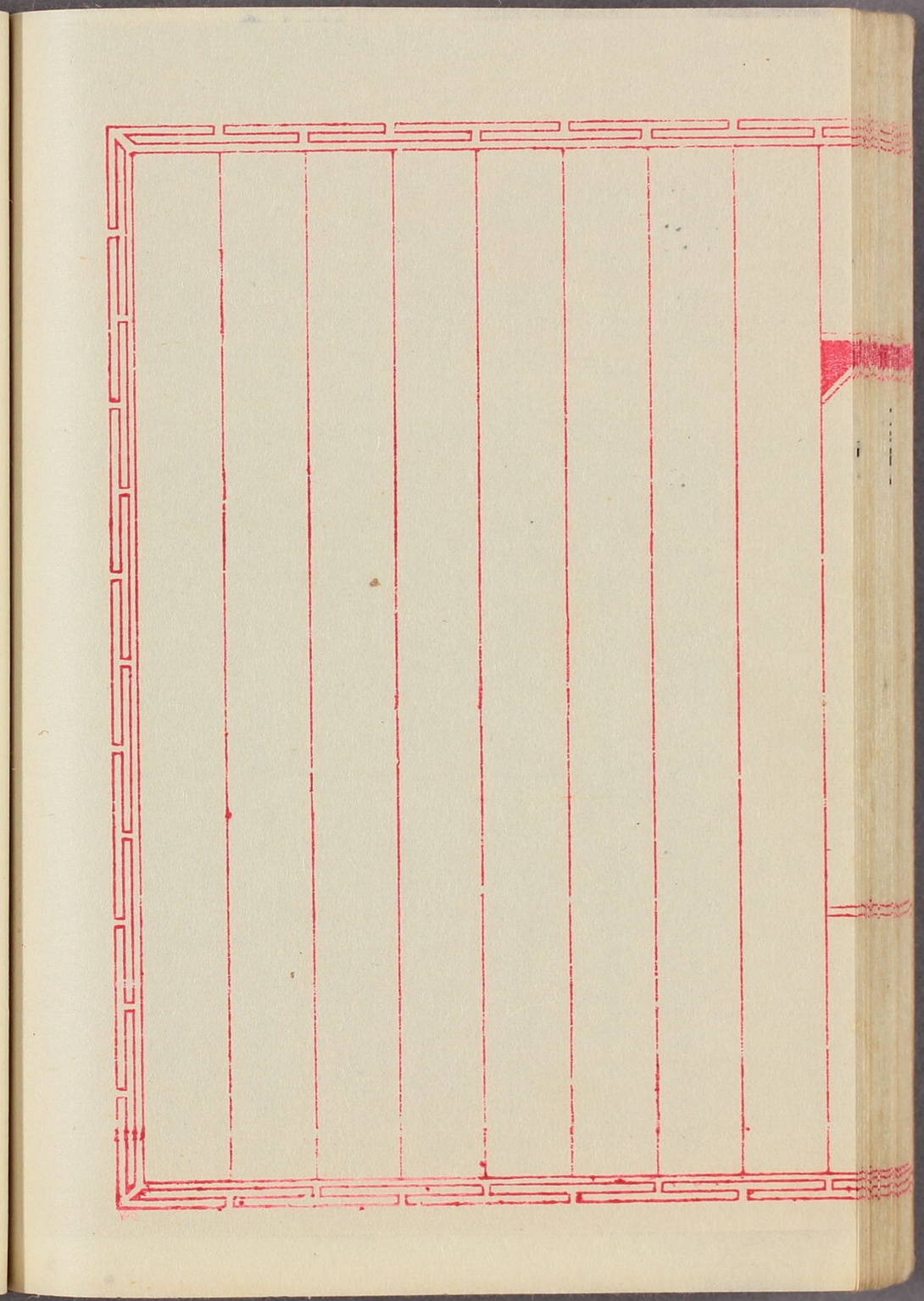
八木節や赤城の山の稲の花

蠅をうつ力もなくて庵の山

蝶や森かくれたの小芋掘
ひぐらしや学よりも己は好き
卯月や夏見えはす老夫婦
髪立て何す這え宮ちきりす
蓑虫の敵ぐそ安し衣食住
時雨子とりて取り残されし栗山哉
早稲の香や天に座せく湯り多
秋海棠日和の歌を啄ミかな

早苗や割れ石垣拾てある
味噌蔵や溝川近く植えてある
（ソレデ濁リテ読ムモ可ナラン）
蛍捨や月を田毎に捨てある
銀杏の葉弦り少なく数り敷き
蛍や一里過ぎて宿かな
橋桁に捨てし（橋南元禄元年）かりまる





以下
17丁
白紙

冬

除夜を霜満都の鐘の響り渡り

九枝の灯の消えぬ間を経もぞ

ひしひしと霜の音さえ竹柱

庭側は往来の雪の跡

鉢叩きの鼠ほたぐるを霜かな

鉢鉢の米の音なれる霜の夕

炭つぐやふるき火の種かきつぐ

冬

曰君子水仙もまれ恨みかな
葉(ハ)ばかり高低したる時分かな
梅咲くや芝ぐんとなし光り艶り
水の音ものして貧乏積る雪
雪降りて世の中黒く見ゆるかな
寒山も蕪を投げて煙捧ひ
拾得もおすものし煙捧ひ
枯芦をくぐりつつ枝ちつ小鳥二羽

連や碎くてくつすぶ氷の音
鬼貫の門高く角もち鉢叩き
薪を小焼く煙ばかり雪空
氷厚(ヒサ)く降るかな摩耶(カタシ)の白鷺かな
炭竈の餘地や蕨萌るかな
手洗のひしやくの手も夜の雪
炬燵して熟睡する舟の春かな
小塔を新り堀めり銀杏の葉

陰雪中蜜柑の皮は消え殘る

水霜中畑は殘る種茄子

初雪やしきりたる蔦妻の路

寒菊中葱畑すり新芽

茶立出掃除する日の書院

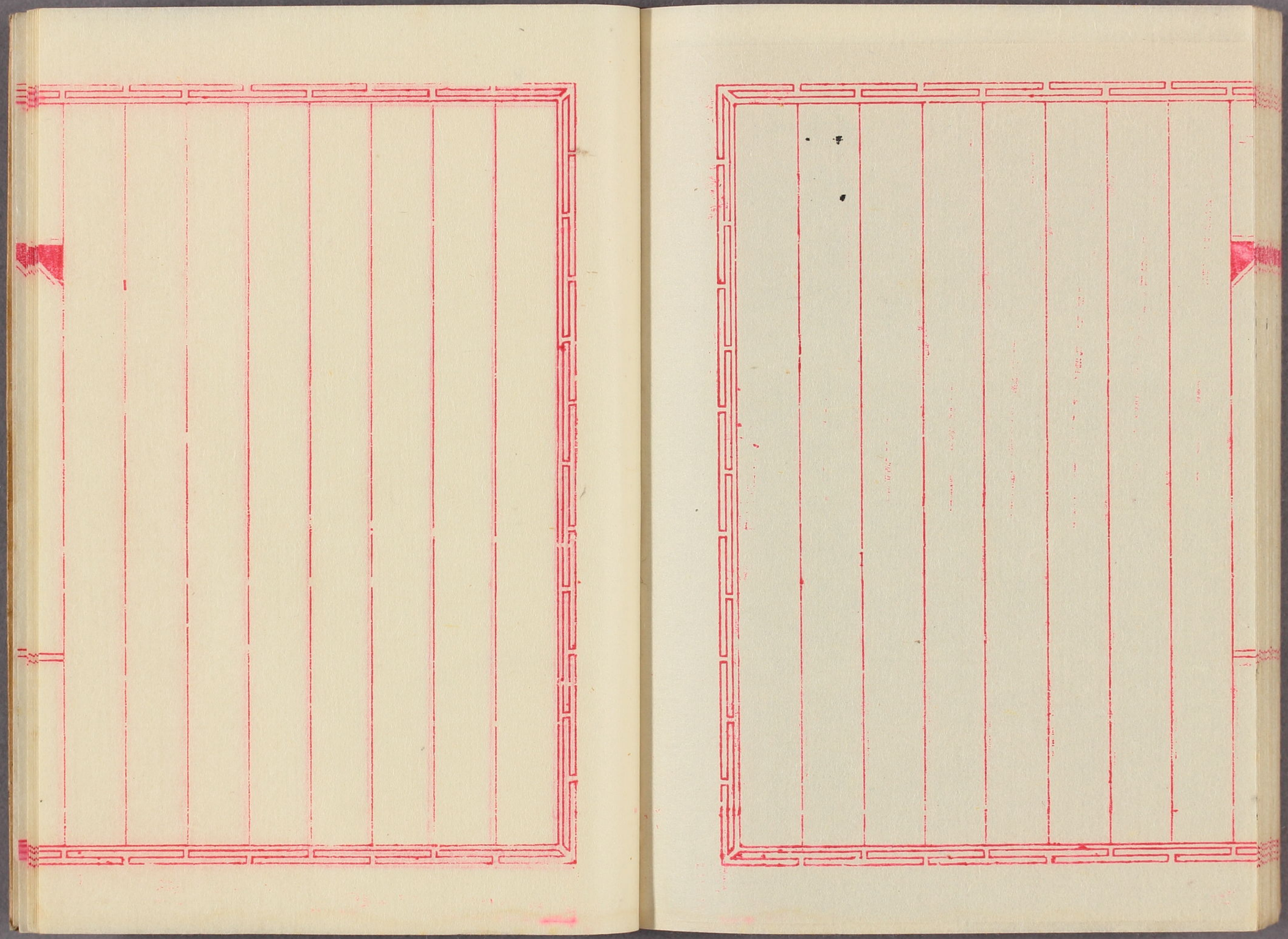
寒林や骨打つ夜の霜柱

○見えぬ人の捜草葉ときく

忍冬中 幼馴染の大ヒカツテ

女郎花刈刈殘る萱野かな

林檎半ば殘りてけり小姉がため



以下

7丁

白紙

(二三、五一八、夜)

無季

病苦死生の際して　儀

死のうは剣の上か釜炉かな

(人間一真に生きるべきうるぎす)

一生を捧ぐるうら荷童かな

一言若し海
○一生を終り参ずて
吾と我が吾を知らずして
我が死し以て
五、三、二、三
○秋来て一言地仲和尚
吾が一言が死ずりけり